

フックフックのエビネルさんとトツカトツカのカニエスさん

1

フックフックの国に住んでいるエビネルさんはやせつちよで、お酒が大好き。トツカトツカの国に住んでいるカニエスさんは太つちよだけど、お酒はぜんぜん飲みません。いいえ、飲めないんです。だからなのか、やせつちよエビネルさんのお腹は出ていて、太つちよカニエスさんのお腹はぜんぜん出ていないのです。

エビネルさんは仕立て屋の見習いで、毎日毎日美しい生地アイロンをかけたたり、服のほころびを縫い直したりして、暮らしていました。店のご主人は、お金持ちのご婦人方いつも楽しそうにおしゃれの話をしていたけれど、お給金の少ないエビネルさんは、余った生地を上手に組み合わせ、自分で縫った服ばかりを着ていたのです。エビネルさんはいつもいつも、楽しそうに話すご婦人方とご主人を見て、思っていたのです。ぼくもいつか自分のお店を持って、ご主人と呼ばれるようになるんだ、つて。

あるとき遠い遠いエックエックの国のえらい王様が、世界中に向けておふれを出しました。

美しい姫のおむこさんを探しているのだが、世界で一番勇気のある若者は、誰かと。

フックフックのエビネルさんは、その話をリンダおばさんから聞きました。そのとき、おばさんはこう言ったのです。

「あんなのよなやせの大酒飲みは、決してお姫様のおメガネにかなうものかい」っ

て。

それを聞いたエビネルさんは言いました。

「でもおばさん、王様はお酒のことをおっしゃってはいないじゃないやありませんか。ぼくはお酒が大好きだけど、それでひとさまに迷惑をかけたたりなんかしない。だから勇気ってやつを示すことができたなら、ぼくにもきつと、お姫様と結婚する権利があるはずですよ」

おばさんは面白くなさそうに顔をしかめました。

「じゃあ、行ってみるがいいさ、あんたのようなくだららない男に、勇気の意味が分かるものかね！」

おばさんは、ケタケタといやらしい笑い声を立てて行ってしまった。

2

トツカトツカのカニエスさんは、きこりの見習いです。親方を見習って真面目に修行を重ねていましたが、とつても臆病な性格で、キツネの鳴き声にも飛び上がって驚くようなありさまでした。毎日毎日木を切って、筋骨隆々の体なのにおかしいですね——カニエスさんは筋骨隆々じゃなくて、ただの太つちよさ、という人も多かったのですが——。

そのカニエスさんは、エビネルさんと同じ話をプルーヌおじさんから聞きました。

「お前さんよう、エックエックの王様を知ってるでな？」

「うん、知ってるともさ。うんときれいなお姫様がいて話聞いたことがある

よ」

「おう、それだそれだ。そのお姫さんのよう、おむこさんを探しているんだと」

「お姫様のムコって言ったら、王子様だろう？ いいなあ王子様は、だまっていたつて、お姫様がお相手なんだものなあ」

「それがよう、カニエス。ちがうんだと」

「ちがうって何がさ」

「王様が探してなさるのは王子様じゃあねえ、世界で一番勇気のある若者だって話さ」

「勇気かい、そりゃあぼくにはちつともないものだなあ」

カニエスさんは夢見るように青いお空を眺めました。雪のように真っ白い雲が、ふんわりと空を泳いでいました。

「最初からそんなこと決めるもんじゃあねえさ。なあ、カニエス、考えてもみな、お姫様と結婚すりゃあ、やがてはお前が王様だぞ」

カニエスさんはプルスおじさんのそんな言葉には耳をかさず、ただただお空の白い雲を眺めていました。

「ボンヤリしてねえで、おじさんにも夢の一つくらい見させてくれたらどうだね、カニエスよう。まさかお前、親のいないお前をここまで育ててやった恩を忘れちゃったんじゃないやあるまいな」

プルスおじさんは、あきれたような怒ったような顔つきで、空の雲を見上げました。すると、どうしたことでしょう、真っ白だった雲が、しだいしだいに黒っぽい色に濁ったと思ったら、ばさりばさりと音が響いて、大きな大きなカラスが雲の中から飛び出してきたのです。

3

大カラスはまるで二人のことを知っているように、目の前に舞い降りました。そしてくるりと体を回転させたのです。すると、あれあれ、と目を丸くしている二人の目の前で、大カラスの羽の中からおばあさんの姿が現われたのです。いいえ、大カラスだと思ったのは、おばあさんの羽織る真っ黒いマントだったのです。くちばしに見えたのは、つばのとがった大きな帽子でした。

黒ずくめのおばあさんが言いました。

「あんたたち、勇気を手に入れたいと話していたね」

「いいえ、そんなことはありません。ぼくには勇気なんてこれっぽっちもないし、欲しいとも思わないんですから」

カニエスさんはプルスおじさんをちよつとだけぬすみ見ながらも、はっきりと言いました。

「困ったおいつ子でさあ。このカニエスにちよつとでも勇気があったなら、わたしも苦労をせずにすむものを！」

プルスおじさんは大げさな身ぶりで、おばあさんに言いました。

「ぼくだって本当は、ちよつとばかりの勇気があったらいいなって、思うことはありませんよ。でもね、それは無理な相談なんです。ぼく、山で木を切っていたって、何かちよつと動くものがいたりするだけで、心臓が止まるくらいにビックリしちゃうんですから」

「こらこら止めんか、カニエスよ。ますますもつてみつともないつたらありやあしないよ」

おばあさんは二人の様子をいらいらしながら見守っていました。

「でもね、おじさん、ぼくはね……」

「えーい、いくじのない男だ！」

そんな二人に、おばあさんはしびれを切らして言いました。

「それで、どうしたいんだい？ ちよつとの勇気でも欲しいってんなら、聞かないでもないんだよ」

「本当かい、おばあさん」

プルスおじさんの表情がゆるみました。

「ぼくはいいよおじさん。このまんまで満足なんだから」

「そんなもんで満足だなんて、どの口で言うかね！ 何でもいい、おばあさんや、どうか、この臆病カニエスに勇気を与えてはくれまいか」

おばあさんは返事をしませんでした。目を閉じて、なにやら口の中でもごもごもしゃべっているように見えました。しばらくするとおばあさんは急にカッと両目を開き、ふところにしまっていた杖を取り出すと、いったん青い空にかざしてから、その先で地面を激しくたたきました。

ずんつ。

そんな音がして、おばあさんが杖で叩いた地面がひび割れました。

「な、な、何をするんだい！」

プルスおじさんがとびのきます。あんまりびつくりしたカニエスさんは、その場にしゃがみこんでしまいました。

「驚いてないで、ここを見るんだよ、二人とも！」

おばあさんの声は、それまでとはちがいで、とても迫力がありました。二人は、おばあさんの声の先を見ます。杖が刺さった地面には、四方八方にひび割れが走っています。でも二人はそれがなんのことだかは分からずに、顔を見合わせました。

「これが、あんたの行く先さ」

「えっ？」

おばあさんの言葉に、カニエスさんがほうけた顔をします。その後また黙ってしまつたおばあさんの視線を追うと、杖の刺さったあたりから、じわじわと水がしみ出ているではありませんか。そしてその水が、地面に広がるひび割れのうちの一本を、すーっと流れていったのです。

「ふーむ」

プルスおじさんが握り拳であごひげをさすりながら、考えこんでいます。

「こりやあ、ユツポユツポの国だな。な、おばあさん、そうだろう？」

「おお、そうさ、その通り。あんたのおいつ子は、ユツポユツポの国で勇気を手に入れなざるだろうね」

「おい、聞いたか、カニエス！」

プルスおじさんはとつても嬉しそうです。だって、ユツポユツポの国まで行けば、臆病なカニエスさんが勇気を手に入れられるって、いうのだから！

5

「あの、おばあさん」

カニエスさんが、おそろおそろ言いました。おばあさんは返事もせず、杖の先で、地面のひびわれをなぞっていました。

「おばあさん、あの、ぼくは一人でそこへ行かなきゃならないんでしょうか」

それもそうです。カニエスさんは、たった一人で旅をしたことなんて、ただの一回こつきりだつてないのです。おばあさんは、黙ったままでうなずきました。それを見たプルスおじさんが、カニエスさんの肩をむんずとつかんで言いました。

「あつたり前じやないか、カニエスよう。お前は勇気を手に入れに行くんだぜ、誰かが一緒にいたら、お前さんのためにはならないよ。な、そうだろう？ おばあさん」

そう言っておばあさんの方を見たつもりプルスおじさんの目に映ったのは、枯れ枝の刺さった地面だけでした。そこにはおばあさんの姿も、杖も、ひび割れもありません。ただ、枯れ枝の影が、ユツポユツポの国の方向へと、真直ぐに伸びていたのです。

「おじ、さん……？」

カニエスさんは、今、目の前で起こったことが本当の出来事だったのかどうか、知

りたかったのですが、そんなカニエスさんに、おじさんは笑って言いました。

「明日にでも旅に出るがいい。きこりの仕事については、おれが親方に話しておくから、心配はないぞ。なんてったって、将来の王様なんだからなあ、わっはっは！」  
プルスおじさんが急に思いっきり背中を叩いたものだから、カニエスさんはまた、びっくりしてしまいました。でも、筋骨隆々のカニエスさんの体は、そんなことではびくりとも動かないのです。

こうして、カニエスさんはユツポユツポの国に向けて、旅立ちました。さてきて、では今ごろ、フックフックのエビネルさんはどうしているのでしょうか？

6

エビネルさんはカニエスさんとちがいで、自分で勇気を手に入れる方法を探そうとしていました。でも、やせつちよでお腹ぽっこりのエビネルさんは、どう見ても臆病で自信なさげな、とてもではないけれど勇気なんか持っているようには見えない、情けない若者だったのです。

ある日、エビネルさんはフックフックの国で一番の力自慢だというチカモスさんを訪ねました。なんでも、チカモスさんは山から下りてきたクマを、素手でやつつけたことがあるというのです。それほどの強い人なら、勇気の手に入れ方を知っているんじゃないかと、エビネルさんは思ったのですね。

エビネルさんの話を聞いたチカモスさんは、大笑い。  
「あんたのようなやせつちよに、勇気の意味なんか、分かるわけがない！ わたしが何を話そうが、あんたのためにはなりやあしないよ！」

チカモスさんはそう言つて、エビネルさんを追い返そうとしました。でも、エビネルさんは諦めません。

「ねえ、力自慢のチカモスさん、ただ、力があるってだけでは、とてもクマに立ち向

かつていくなんで、できることではありません。あなたは どうして、そんな素晴らし  
い勇気を手に入れたんですか？」

チカモスさんは、にこりと笑いました。

「勇気なんてやつはな、探したって手に入れられるもんじゃやない。わたしはね、わた  
しの愛する家族を守るために、必死でクマのやつに立ち向かっていったのさ。ただ、  
それだけなんだ。だからね、あんなのような独り身の若造には、逆立ちしたってこの  
気持ちは分らないのさ」

エビネルさんは納得できませんでした。エビネルさんにだって、家族はいます。リ  
ンダお婆さんはちよつといじわるだけれど、子どものところに死んでしまったお父さん  
の、たった一人の妹なのです。ずっと小さいころに死んでしまったお母さんのこと  
は、エビネルさんは何も知りませんでした。だから、リンダお婆さんは、エビネルさ  
んにとつてお母さんのようなものだったのです。

ぼくは、リンダお婆さんをどのくらい愛しているだろうか。エビネルさんは、じぶ  
んの心にそつと問いかけてみました。もし、突然恐ろしいクマが襲ってきたら、ぼく  
は、リンダお婆さんを救うために身を投げうつことができるだろうか……と。

「わたしがもう少し若くて独り身だったらなあ、お姫様か……」

そんなことを言いながら、チカモスさんは行ってしまいました。そうそう、この国  
には、エビネルさんの他にも若くて独り身の男がたくさんいるのです。ぐずぐずして  
はおれません。エビネルさんは、もういてもたってもいられず、とにかくエツクエツ  
クの国へと向かうことにしたのでした。

7

さて、カニエスさんの様子を見てみましょう。カニエスさんはプルスおじさんに

もらった地図をたよりに、ユツポユツポの国を目指していました。体力に自信のあるカニエスさんは、三日三晩ずっと歩き続けて、ようやくユツポユツポとの国境にやってきました。どうして、三日三晩も歩き続けたか、ですって？ そりゃあ、決まっています。トツカトツカの国とユツポユツポの国の間には、旅の宿屋が一軒もないんですもの。お腹がぺこぺこのカニエスさんは、道端でお休みするよりも、一刻でも早くユツポユツポの国に入る方を選んだのでした。

ユツポユツポの国境で、見張り番の男が聞きました。怖い顔で、カニエスさんをにらみつけています。

「お前さん、こんなところで何をしているんだね。どうして、トツカトツカの方からなんて歩いてきたんだ？」

そう、トツカトツカの国からユツポユツポの国に入ろうとする人なんて、この何十年の間、ただの一人もいなかったのです。両手を広げて立ちほだかる男に、カニエスさんはどうどうとして言いました。

「ぼくはカニエス。トツカトツカから来たカニエスです。きこりの見習いをしていきます。ぼくは、とてもご恩のあるプルスおじさんを助けるため、旅に出ました。この国で、勇気を手に入れるつもりなのです」

「ほう、なんとまあ、トツカトツカの国からはるばる来たのかい。それに、勇気、とね？ ふむふむ、それは面白い。それで、どうやってやるつもりだい？」

男は決して、面白がつてなんかいないようです。どちらかというところ、カニエスさんをばかにするような口ぶりで言ったのですから。

「それは、分からないのです。でも、この国に来ればきつと見つかるんじゃないかって、あの……」

そう話すカニエスさんの声は、次第に小さくなっていました。そういうえば、ユツポユツポの国でどうすれば勇気を手に入れることができるかなんて、黒ずくめの不思議

なおばあさんはなんにも言っていないませんでしたよね。

「はっはっは！ お前さん、そんなことしか分からないのに、ずっとずっと遠くから歩いてきたのかい？ なんて愚かな若者だろうよ！」

男はそう言うと、どこかへ歩き去ってしまいました。きつと、カニエスさんがユツポユツポの国に入ることを止める必要なんて、まるつきりない。わが国にとって、なんの害もないにちがいない。そう、決めつけたのでしよう、ね。

カニエスさんは、もうへとへとでした。でも、せつかくユツポユツポの国に入るこ  
とができたのです。もう少し、今日ばかりは明るいうちに、宿屋さんのある場所ま  
で行かなきゃ。そう決めて、カニエスさんはまた歩き始めました。でも、カニエス  
さんは宿屋を見つけることができませんでした。そしてとうとうその場に、ばったりと  
倒れてしまったのです。

(つづく…電子書籍版の発売をお楽しみに！)